



TITLE:

京大広報 No. 671

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

---

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 671. 京大広報 2011, 671: 3507-3522

ISSUE DATE:

2011-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196409>

RIGHT:



# 京大広報

No. 671

2011.10



中学生向けゼミ体験講座「ジュニアキャンパス2011」  
—関連記事 本文3520ページ—

## 目次

K.U.PROFILE の現状と今後の課題 ーグローバル人材の育成に向けて 副理事・国際交流推進機構長 森 純一……	3508
<b>〈大学の動き〉</b>	
トルコ・コッチ大学と大学間学術交流協定 および大学間学生交流協定を締結すると ともに第16回京都大学国際シンポジウム を開催……	3510
博士学位授与式を挙……	3511
部局長の交替……	3512
<b>〈部局の動き〉</b>	
生存圏研究所が「高度マイクロ波エネルギー 伝送実験装置及び高度マイクロ波電力伝送用 フェーズドアレイ・受電レクテナシステム 披露会」を開催……	3512
<b>〈寸言〉</b>	
私が弁護士になった理由 辻川 圭乃……	3513
<b>〈随想〉</b>	
バカヤルー 名誉教授 小南 一郎……	3514

<b>〈洛書〉</b>	
出会いを振り返る 福澤 秀哉……	3515
<b>〈話題〉</b>	
京都大学 VBL グローバルリーダー 育成カップ2011を開催……	3516
京都大学学術情報リポジトリ「KURENAI」が 世界ランキング第8位の評価……	3517
人文科学研究所第7回「TOKYO 漢籍 SEMINAR」 を開催……	3517
研究作品がニューヨーク近代美術館パフォー ミングアート&メディア部門のコレクション に選定……	3518
東北復興支援に学生ボランティアを派遣……	3519
中学生向けゼミ体験講座「ジュニアキャンパス 2011」を開催……	3520
防災研究所公開講座「巨大災害にどう立ち 向かうかー想定とその限界ー」を開催……	3521
平成23年度総長杯(卓球大会)を開催……	3521
<b>〈訃報〉</b> ……	3522

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## K.U.PROFILE の現状と今後の課題 ーグローバル人材の育成に向けて

副理事・国際交流推進機構長 森 純一

京都大学は、留学生30万人計画(グローバル30, G30)の拠点大学の一つとして、平成20年度よりK.U.PROFILEを推進してきました。K.U.PROFILEは全学のご協力を得て、これまで順調に進展してきましたが、新たな課題も出てきており、今後とも学内外の方々のご協力が不可欠です。ここでは、K.U.PROFILEの現状と今後の課題についてご報告致します。

K.U.PROFILEは、将来の世界のリーダーを育成することを目的に、英語だけで入学・卒業できるコースを開設して、世界中から優れた学生を募るものです。平成21年度を初年度とした期間5年の全学プロジェクトで、計画された英語コースはすべて予定通りに開設されてきています。学部では工学部の国際コースが平成23年4月に開設され、大学院についても9研究科1専門職大学院で平成22年度に6コース、平成23年度に5コースが開設されました。

平成23年4月現在の受入学生は150人(うち日本人18人)です。英語で学習できる環境を提供したことにより、アジア、中東、アフリカ、中南米、欧州など幅広い国々からの学生招致を行うことが出来ました。全学の留学生数も短期交流学生を含め、平成22年度末には約2,000名と当初目標を上回っています。コース開設部局では、全学で28人の外国人教員を新たに採用し、幅広い知見を動員してカリキュラム作成を進め、全学および各部局でのFD活動を展開しています。

世界各地で積極的な留学生招致活動を行い、多くの説明会を開催したほか、英語での入試を基本に、書類による審査、現地に出張しての面接、遠隔会議システムを利用した面接などを行い、志願者への便宜を図っています。また、中国を中心に受験生の



利便性向上と入学者の質の向上を目的として、東アジア圏アドミッション・アシスタンス・オフィスを開設しました。ベトナムには、ベトナム国家大学ハノイ校との共同オフィスを

開設し、日本全国の大学共同利用拠点としてのサービス提供を行っています。

また、新たな国際交流会館として「みささぎ分館」を取得し、さらに新宿舍の建設に着手しています。K.U.PROFILE学生のための奨学金・学費免除枠を設け、優れた学生招致の一助としています。部局での英語対応が可能となるよう、英語に堪能な職員を参加部局に配置するとともに、学内文書の英文化を進めました。併せて、ビジネス日本語や桂・宇治キャンパスの留学生のための日本語遠隔授業を始めました。

K.U.PROFILEでは、日本人学生の海外派遣にも積極的に取り組んできました。交換留学先として人気の高い英語圏の学生交流協定校を増やすとともに、豪州と中国への短期語学異文化研修プログラムや米国でのインターンシッププログラムを、全学レベルで開発しています。年間600名強の日本人学生を海外派遣しております。

グローバル人材の育成は国内外を問わず、高等教育界のキーワードの一つになっています。現在、世界中でグローバル人材育成への動きが加速しています。米国は世界一の留学生受け入れ国ですが、米国人学生の海外派遣も強力に推進しています。これまでは米国が技術的優位に立っているとの認識から、留学実績のなかったエンジニアリングの分野でも学部生に海外経験をさせようとしており、ハーバード

大学では学部生の50%を海外派遣することが目標とされています。欧州では「エラスムス計画」が実施され、毎年10万人以上の学生達がEU域内の他国で半年から1年の留学を経験します。中国では「国家建設高レベル大学公派研究生項目」、略して「高レベル」と呼ぶプログラムで、毎年6,000人の博士課程学生を世界中に派遣しています。

さて、G30は昨年度、事業仕分けの対象となり、内容について再検討が行われました。その結果、当初は留学生の受入が中心的な課題でしたが、今後は産業界と協力し、日本人学生も含めたグローバル人材育成に、より重点を置くことになっています。また、その成果をG30拠点大学だけでなく、幅広く日本の高等教育界で共有できるようにすることとなりました。

なぜ今、グローバル人材なのでしょう。一つは日本企業の海外展開が加速しているためです。国際開発銀行(JBIC)の「我が国製造業の海外事業展開に関する調査報告-2010年度海外直接投資アンケート結果」のなかで「海外事業に対する中期的な取組姿勢では約83%の企業が強化・拡大すると回答(前年比17ポイント増)、アジア諸国向けを主として海外事業への意欲はより積極的に。」と報告されています。本年3月の東日本大震災以降、企業の海外志向は一段と強まっているようです。日本企業の求める人材も変化をしています。たとえば、パナソニック、ファーストリテイリング(ユニクロ運営会社)、ローソンでは、海外採用を大きく増やす中で、国内採用は大きく減らすか、微増になっています。

このような状況を背景に、本年4月には文部科学・経済産業両省が事務局を務めた「産学人材育成パートナーシップ」が、6月には日本経済団体連合会が、それぞれグローバル人材について報告書を公表しました。7月には内閣官房長官が議長を務め、外務、文部科学、厚生労働、経済産業、国家戦略担当各大臣からなる「グローバル人材育成推進会議」が「中間

まとめ」を発表しています。

上記三つの提言では、グローバル人材の資質として、主体性・積極性、チャレンジ精神などの社会人としての基礎力に加えて、外国語でのコミュニケーション能力を持ち、異文化理解と活用能力を持つことが挙げられています。経団連の報告書には、産業界からの大学教育への期待も盛り込まれており、「専門科目を外国語で履修するカリキュラムの構築」、「企業の経営幹部・実務者から、グローバルビジネスの実態を学ぶカリキュラムの実施」がトップに挙げられています。

最後に、今後のK.U.PROFILEの具体的な課題を述べたいと思います。英語が中心となるでしょうが、外国語での講義をいかに増やしていくかは引き続き大きな課題です。本学全体で30%を英語ないし他の外国語での講義にできればと考えています。正規学生の海外派遣を増やすことも課題です。

また、ダブル・ディグリーなどの先端的な教育プログラムの導入も大きな課題です。世界の大学では、ダブル・ディグリー・プログラムにより学生に自国と海外の両方で勉強させることも頻繁に行われるようになっています。英国のキングズカレッジを訪ねた際も、先方の副学長が「ダブル・ディグリー」の出来ない大学とは交流協定を結ばないと言っていました。また、ドイツのハイデルベルグ大学では、大学院生のダブル・ディグリー・プログラムを数件実施しており、本学と博士課程学生会議や、博士課程学生の共同養成を行いたいとの要請も受けています。本学としても、英語講義の増加策やダブル・ディグリーの導入のためのワークフォースを近々立ち上げたいと考えています。

京都大学が、山積する国内外の課題に果敢に挑戦するグローバル人材育成の世界拠点として、ますます発展することを希望しています。



## 大学の動き

### トルコ・コッチ大学と大学間学術交流協定および大学間学生交流協定を締結するとともに第16回京都大学国際シンポジウムを開催

本学は、9月7日(水)、トルコ・イスタンブールにあるコッチ大学と長期的な国際交流を目指した大学間学術交流協定および大学間学生交流協定を締結した。また、交流協定締結を記念し、9月7日～9日(金)の間、「第16回京都大学国際シンポジウム：革新的な持続的発展」をコッチ大学との共催により同大学にて開催した。今回のシンポジウムは、「革新的持続可能な発展」をテーマとして、両大学の経営、経済、工学、情報、医学分野の研究者およびトルコのトップエグゼクティブが集い、これからの持続可能な社会への発展について発表、討論を行った。2日半にわたるシンポジウムには、研究者、学生、企業関係者から延べ約170名の参加があり、本学からは松本 紘総長、吉川 潔理事・副学長、森 純一国際交流推進機構長、美濃導彦情報環境機構長、小林潔司経営管理大学院長のほか14名が出席した。



交流協定締結式の様子(イナン学長(左)と松本総長)

シンポジウムは、主催者のコッチ大学イナン学長および松本総長の開会の挨拶の後、荒木喜代志駐トルコ共和国特命全権大使およびニユケト・イエティシュトルコ科学技術研究評議会前会長からの交流協定締結に対する祝辞により始まった。その後、オー

プニングセッション「革新的な持続的発展における大学の役割」では、松本総長の講演があり、「人口増加や資源枯渇といった地球規模の問題に対処していくために、ある特定の専門分野に特化することなく、幅広い知識と深い専門性を両立させた柔軟性ある思考と実行力を持った次世代リーダーたる人材の育成が求められている」と述べられた。

2日半にわたって開催されたシンポジウムは、オープニングセッションのほか、9つのセッションがあり、コッチ大学の教員、トルコの企業のトップエグゼクティブ、本学の教員からそれぞれの視点、最新の研究成果に基づく持続的発展について発表され、発表者と聴衆との活発な質疑応答が行われた。さらに、シンポジウム開催期間中に、3グループに分かれてコッチ大学の医学部、工学部、経営学部を訪問し、各学部長から説明を受けるとともに研究施設を見学した。その結果、経営学、工学、医学の各分野での共同研究の実施について、前向きに取り組むこととなった。

また、シンポジウムの開催に先立ち、9月6日(火)には林 克好在イスタンブール日本国総領事の主催によるレセプションを開催していただいた。レセプションには、トルコ側発表者と本学発表者を招待いただき、和やかな雰囲気の中、両国の参加者が歓談し親睦を深めることができた。

今回の学術交流、学生交流協定の締結およびシンポジウムの開催を端緒として、互いの研究活動を知る絶好の機会となり、コッチ大学との研究交流、学生交流が促進され、ひいては日本とトルコ共和国とのさらなる友好関係の発展が期待される。



林総領事主催レセプション参加者集合写真

(研究国際部)

## 博士学位授与式を挙行

9月26日(月)午前10時30分から、百周年時計台記念館において、松本 紘総長、理事・副学長をはじめ、各研究科長・学舎長、理事補出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

松本総長から、各授与者に対し学位記(平成23年5月23日付、7月25日付、9月26日付)が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時23分に終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。総長式辞は総長室ホームページに掲載している。

[http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/profile/intro/president25/speech/110926\\_1.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/profile/intro/president25/speech/110926_1.htm)



松本総長による学位記の授与

学 位	平成23年5月			平成23年7月			平成23年9月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	2	—	2	—	1	1	5	1	6
博士(教育学)	1	—	1	3	1	4	3	1	4
博士(法学)	—	—	—	—	—	—	3	—	3
博士(経済学)	1	—	1	5	4	9	3	1	4
博士(理学)	7	—	7	2	—	2	6	—	6
博士(医学)	17	5	22	13	3	16	12	2	14
博士(医科学)	1	—	1	—	—	—	—	—	—
博士(社会健康医学)	—	—	—	—	—	—	—	1	1
博士(薬学)	—	—	—	—	2	2	1	1	2
博士(薬科学)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
博士(工学)	7	1	8	4	1	5	39	1	40
博士(農学)	5	2	7	3	2	5	6	3	9
博士(人間・環境学)	1	—	1	2	—	2	3	—	3
博士(エネルギー科学)	1	—	1	1	—	1	9	—	9
博士(地域研究)	—	—	—	2	—	2	1	—	1
博士(情報学)	1	—	1	2	—	2	10	—	10
博士(生命科学)	1	—	1	4	—	4	3	—	3
博士(地球環境学)	1	—	1	—	—	—	—	—	—
計	46	8	54	41	14	55	104	11	115



博士学位授与式会場の様子

(学務部)



## 部局長の交替

(新任)

### 野生動物研究センター長

幸島司郎野生動物研究センター教授(健康長寿科学研究部門担当(健康長寿科学))が、伊谷原一野生動物研究センター長の後任として、10月16日付けで選出された。任期は平成25年10月15日まで。



## 部局の動き

### 生存圏研究所が「高度マイクロ波エネルギー伝送実験装置及び高度マイクロ波電力伝送用フェーズドアレー・受電レクテナシステム披露会」を開催

生存圏研究所では、9月28日(水)に「高度マイクロ波エネルギー伝送実験装置及び高度マイクロ波電力伝送用フェーズドアレー・受電レクテナシステム披露会」およびデモ実験を行った。本研究装置は、2010年度に当研究所に導入された研究設備で、生存圏科学、宇宙太陽発電所SPS(Solar Power Satellite/Station)や無線電力伝送および電波科学一般の研究に利用できる全国共同利用研究設備である。

披露会では、松本 紘総長の式辞の後、澤川和宏文部科学省研究振興局学術機関課長、佐々木 進宇宙航空研究開発機構研究開発本部高度ミッション研究グループ長(宇宙科学研究所教授)、本城和彦IEEE MTTS Japan Chapter Chair・電気通信大学教授からそれぞれ祝辞をいただいた。引き続き、篠原真毅生存圏研究所教授から研究装置の紹介が行われた。

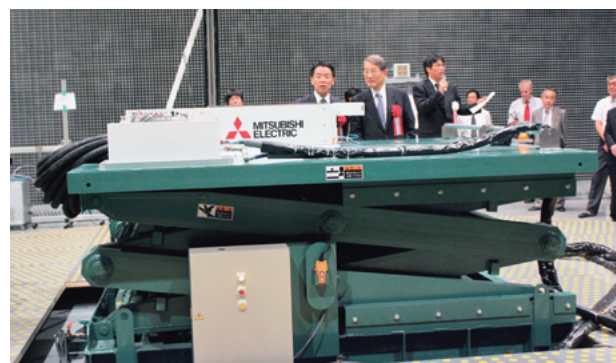
デモ実験では、導入された近傍界測定装置を用いた高度マイクロ波電力伝送用フェーズドアレーのマ



近傍界測定装置を用いた測定について説明する篠原教授  
マイクロ波エネルギー伝送の測定や、直径10mの擬似電力試験衛星の展示が行われ、参加者はSPSや無線電力伝送の現在の研究や将来の構想について熱心に見学された。本研究設備は、将来の太陽エネルギー利用と宇宙開拓を飛躍させるものとして注目度が高く、披露会には140名を超える関係者の参加をいただき、テレビ・新聞・web等で広く取り上げられた。



式辞を述べる松本総長



デモ実験見学の様子

(生存圏研究所)

## 寸言

## 私が弁護士になった理由

辻川 圭乃

実は、私は、大学時代は、文学部でした。国史科で、奈良時代の律令制度などを専攻していました。卒論のテーマは確か、「律令制度における氏女制度に関する一考察」でした。それが、なぜ、今弁護士をしているかといいますと、話せば長くなります。



国史科を選んだ理由は、太古の時代を、悠久の時代を超えてあれこれ想像するのが好きだったので、ただ漠然と古文書を勉強したいなと思ったからです。ただ、大学での時間はあっという間に過ぎます。3年生のころ、そろそろ就職のことを考えないといけない時期になり、ふと気がつくと、好きなことを生業とすることが難しいという現実と直面することになりました。今でいう就活をしようにも、当時はまだ、男女雇用機会均等法もなく、4年制大学を出た女性の就職先など、民間にはまったくなかった時代です。男女平等に門戸が開かれていたのは教員と公務員でした。

そこで、私は公務員試験を受けることにしましたが、専門知識を活かす職種はどこも採用人数が非常に少ないのです。どの分野にも非常に優秀な人がいます。京都大学に入学してそれは痛感しました。採用枠が少ないと、非常に優秀な人しか採用されません。たとえば、採用が1名なら、1番にならなくてはなりません。100名なら、100番でよいのです。ですから、倍率が同じなら、採用枠が大きい方が受かりやすいのではと考えたのです。公務員試験で採用枠が大きいのは法律職です。なので、法律職で受けることにしました。「律令」もいわば奈良時代の法律です。現在の法律と関係ないこともないだろうと考えました。

運よく、大阪市役所に就職することができましたが、当時はまだまだ「男社会」でした。男性職員に伍してバリバリ活躍されている女性の方もいらっしゃ

いましたが、そのためには独身で、あるいは結婚しても子供は持たずに、男性とまったく同じように働くことが求められていました。私は嫌でした。出世をしたいとは思いませんでしたが、産休を取る女性職員に対して向けられる、「女性はこれだから困るんだよな」という眼がたまらなく嫌でした。育休制度ができ、「イクメン」なる男子が登場するなんて思ってもみなかったころです。子供も産みたいし、子育てもしたい。なので、いったん休んでも復帰ができるよう資格を取ることにしたのです。そこで、司法試験を受けて弁護士になりました。

誰でも相談できる町医者のような法律事務所をめざして、現在のところに事務所を開いてもう14年になります。14年前は、職住近接がまだ珍しかった時代です。裁判所から遠いそんなところに事務所を開いてやっていけるのかと言われました。でも、まだ、3番目の子どもが幼稚園の年中組でしたので、何かあれば飛んで帰れるよう、できるだけ自宅に近い場所で仕事をしたいかったです。

今では、主に個人からの依頼が中心で、民事事件、家事事件、刑事事件、行政事件、破産事件などいろんな事件を扱っています。どちらかと言うと弱者側からの依頼が多いです。いろいろな経験をしていろいろな痛みを知ると、他の人の苦しみ、痛みにも想像力を働かすことが可能になります。その意味で、紆余曲折を経て弁護士になったことはプラスであったと思います。

私がここで、申し上げたいことは、常に頭を柔らかくして、将来を見てほしいということです。ある場所に行きつくには、いろいろな方法があります。飛行機や新幹線でひとつ飛びということもあるでしょうし、各駅停車で行く旅もあるでしょう。途中で下車して、目的地が変わってしまうこともあるかもしれません。それはそれで全然構わないと思います。自分にとって何が一番大事なのか、何がしたいのかを問いかけながら歩いて行っていただきたいと思います。既成概念に縛られない自由で柔軟な発想力が京都大学の伝統なのであります。

(つじかわ たまの 弁護士(辻川法律事務所)  
昭和55年文学部卒業)



## 随想

## バカヤルー

名誉教授 小南 一郎

1970年代の終わりの頃、わたしは、京都大学文学部の助教授であったが、北京の日本大使館へ出向をし、一年余りの期間、北京で生活をしたことがある。ちょうどその前年に四人組が権力を失い、文化大革命は終わったが、中国がどの方向へ進むのか、まだはっきりとしない時期であった。北京には、みんなが平等に貧しい故に明るさがあった敗戦直後の日本社会に育ったわたしには、なにか懐かしさを感じさせる人々の生活があった。

その期間、中国語に上達するという目的もあって、できるだけ映画やお芝居を見た。当時、上演されている作品には、革命を賛美する題材のものが多かった。その頃に見た映画の一つに、日中戦争中の中国人の反抗を描いた遊撃隊のものがある。悪逆を尽くす日本軍に抵抗をし、最後は、遊撃隊長が「中国人民の恨みを知れ」と叫んで、日本軍の隊長を短銃で射殺するという、いわば勧善懲悪の筋書きであって、同時期に作られていた、鉄道遊撃隊や草原遊撃隊などの映画ほど内容に深みはなかったのかも知れない。

その映画の悪役は、加藤だったか鈴木だったか、そうした名前の日本軍の隊長であった。その隊長を中国人の俳優が演じているのであるが、この隊長の人物像の上に、中国の人々が見た日本軍や日本人に対する共通観念が反映しており、興味深かった。その隊長は、あやしげな中国語で中国人と応対する。  
ダーダーダハオ  
 「大大的好」などと、いかにも日本人が使いそうな、まちがった中国語をしゃべり散らすのである。日本人をよく観察しているなど、自分の使う中国語にも引きつけて、いささか感心をした。

この隊長は、また盛んに「バカヤルー」と叫んだ。これは、日本語の「馬鹿野郎」の中国語なまりであるに違いない。他の映画や演劇でも、日本軍人が出てくると、「バカヤルー」と叫ぶのが常であって、日本



人が使った「馬鹿野郎」という罵語が、中国の人々に大きな印象を与えたことが知られる。

日本近代の学術用語が大量に中国語の中に取り入れられたことはよく知られている。当時の中国の国学者たちは、そうした用語を汚い語彙だとして違和感を表明しているが、日本語から学術用語を取り入れる趨勢を押し止めることはできなかった。汚い用語だと批判される最も重要な点は、それらの用語が発音の点で十分に洗練されていないことにあったのだろう。日本人の多くは、漢字を二つ重ねれば、それで新しい用語を生み出せると考え、その発音を考慮することがない。それに対し、中国の人々は発音を重視する。

中国の人たちが実際の発音を重視することについて、わたしがそれを痛感した、次のような経験がある。中国で開かれるシンポジウムに招かれ、そこで報告の予定として「中国古代飲酒儀礼小議」という題目を知らせた。親しい主催者から題目を受け取ったという返事とともに、これでも良いが、儀礼の儀と小議の議とは発音が近いから、自分なら小議を別の用語に変えるだろうとの忠告があった。中国の人々が、こんな部分の発音にも注意をはらっているのだと知って、いささか驚いたのであった。

日本から移入した学術用語は、みな中国音で発音される。そのほか、日本の人名でも地名でも、漢字はみな中国音で発音するので、聞いただけで同定するのがむづかしい。神戸に滞在する中国人学者から、「河源亭」(相手の発音を暫定的に漢字に当てたもの)で会おうという電話がかかり、それが河原町のことだと気付くのに二、三分かかったこともある。けっしてカワラマチと発音してはくれない。このように、日本の用語を輸入しても、漢字の発音に中国音を用いるという原則は厳守されている。そうした中で「バカヤルー」は、日本語の発音をそのまま取り入れた珍しい例である。その珍しい例が日本の罵語であるのは、歴史的に不幸な背景があるとはいえ、いささか悲しい。

(こみなみ いちろう 平成17年退職 元人文科学研究所教授、専門は中国古代文化)

## 洛書

## 出会いを振り返る

福澤 秀哉



私の京都大学との出会いは小学校時代に遡る。当時岩倉にいた伯母に勉強を教えてもらうという名目で、月に何度か岩倉に通っていた。実際には、市電の運転席横に陣取り、運転手の加速レバーの切り替えと、ブレーキの抜き具合の妙技に感心しながら、小旅行を楽しんでいた。ある日その道中、東一条の電停で市電が立ち往生した。目の前の西部講堂では、タオルを顔に巻きヘルメットを被った白衣の人たちと、こん棒と盾をもちヘルメットを被った人たちが対峙していた。小学生の私には、それが一体何なのか、なぜ白衣の人が盾を持つ人に石を投げつけているのかわからず、じっと運転再開を待つばかりだった。京都大学の存在を知ったのはこの時であった。

数年後、西部講堂隣の体育館で入学式に出席した。しかしそこでは、あの小学校の時に見た風景がビデオで再生されているようであった。横断幕と旗を掲げた白衣の人たちが舞台上上がり、ハンドマイクで私たち新入生に何かを訴えかけていた。希望がぼんやりとした不安に変わったことを思い出す。この演説の後には、学歌斉唱から始まる厳かな式典が進められた。

私は農学部入学と同時に音楽部にも「入学」したので、その後も入学式には何度か出席することになった。実際には「九重に花ぞ匂へる…」で始まる学歌の演奏に加わっていた。これまで、この学歌の他に、応援歌「新生の息吹」や逍遙の歌「紅もゆる」は耳にしていたが、学生歌が存在することは知らなかった。ホームページによると、昭和28年に公募によって制定されたとある。時代を映した歌詞「光溢るる蒼空に無限の時を刻みつつ 逝きて帰らぬ青春の…」に曲をつけたのは、当時医学部の学生であり、後に医学部で教鞭を執られた眼科医の故芥川 徹先生(1931-2004)であった。人を和ませる冗談を好まれ、

ビオラの名手でもあった先生は、当時を振り返って友人に「賞金稼ぎのために作った曲だよ。」と話されていたそうだが、その曲がどのような曲なのかは、今や知るすべがなく残念である。先生とは在学中に出会い、コンサートヘボウやムジークフェラインへも一緒にすることができたが、楽譜をお借りすれば良かったと後悔している。

東京大学に4年間奉職した後、再び京都大学に籍を置くことになり、農学部にて初めて開講される「分子生物学実験及び実験法」の担当を仰せつかった。それまでの「核酸の生化学」から一歩踏み込んで、DNAを使った大腸菌の形質転換などを始めた。その中で、新しい教材として東京で出会った緑藻クラミドモナスを使ってみることにした。

この生物は、田圃や畑の土の表面に生息する微生物の一種で、細胞1個が一個の生命体である。液体培地で培養すると抹茶のように見える。光合成により二酸化炭素を固定して酸素を放出するので、藻類として植物に分類される一方、鞭毛で泳ぐことから緑色鞭毛虫として動物にも分類される。おまけに微生物には珍しく雄雌が交配し子孫を残すことから、遺伝学の研究材料としても使われている。

分子遺伝学では変異株が大切である。変異株とは、正常株に比べて何らかの能力を失っている株のことを指すが、この変異の原因を突き詰めることで、生命の生きざまを決めている因子(遺伝子)や、因果関係が理解できる。変異株を研究するには忍耐が必要である。しかし、「ああ、そうだったんだ!」と変異の原因を知って喜ぶ瞬間を経験すると、その喜びを再度味わいたいと思い、また次の変異株を調べ始めるのである。学生にも、そのような喜びを味わってもらいたいと思いつつ、実験室を廻って声をかけている。近年、「何億年もの年月をかけて藻や樹木が大気中の二酸化炭素を光合成で固定し、その結果できた石油や石炭に替わるエネルギーを、現代の藻で作れないか。」といった挑戦的な研究が話題に上っている。その一翼を担う生物に出会ったことを幸いに思う。

(ふくざわ ひでや 生命科学研究科教授、専門は分子細胞生物学)

## 話題

## 京都大学 VBL グローバルリーダー育成カップ2011を開催

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)では、「グローバル×イノベーション」をテーマに世界に革新をもたらす新型ビジネスプランを立案するコンテスト「京都大学VBLグローバルリーダー育成カップ2011」を、今年度は例年の大学生部門に加えて、高校生からも募集し開催した。本コンテストは、VBL・京都市教育委員会・高等学校コンソーシアム京都および株式会社ネオトラディションで構成されるグローバルリーダー育成協議会の主催によるものである。

## 【大学生部門】

大学生部門には全国から1,020名ものエントリーがあり、国内からは本学をはじめ東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学など全国の大学から、また、海外からもアメリカ、中国、韓国など幅広い国籍の学生の応募があった。その中から書類選考を通過した48名が京都市内に集まり、8月17日(水)～20日(土)の3泊4日の合宿を経て、百周年時計台記念館での最終コンテストに臨んだ。

## ■大学生部門結果(敬称略)

## &lt;優勝&gt;

チーム「川」: 小川夏輝(奈良高等専門学校), 渕野信也(京都大学), 川崎龍吾(早稲田大学)

## &lt;三井物産賞&gt;

チーム「パンと紅茶」: 坂本莉沙(お茶の水女子大学), 河本和宏(京都大学), 松田和将(慶應義塾大学)

## &lt;アクセント賞&gt;

チーム「M3」: 近藤紘史(立教大学), 目崎雄太(早稲田大学), 劉宇陽(京都大学)

## &lt;ネオトラディション賞&gt;

チーム「DARS」: チョンボラ(京都大学), 古舘涼介(慶應義塾大学), 中沢大樹(大阪大学)

## &lt;最優秀個人賞&gt;

河本和宏(京都大学)

優勝チームは、チーム「川」でシルバー層に向けた若年層支援を謳ったビジネスプランであった。プレゼンテーションにおける完成度の高さはもちろんのこと、質疑応答においても常に適切な回答で返すなど、一貫した質の高さを感じさせた。また、決勝に進んだチームには、協賛企業名等を冠した各賞が授与された。最優秀個人賞には、三日間学生たちと接してきたメンターや運営スタッフからも強い推薦があった河本和宏氏が選ばれ、スタンフォード大学の研修権が付与された。

## 【高校生部門】

8月5日(金)、百周年時計台記念館にて、高校生部門を開催した。高校生部門は、京都市教育委員会および高等学校コンソーシアム京都の協力の下、今年度新設した行事である。

「社会貢献について、あなたからの新たなアイデアの提案」をテーマに、1チーム3名～6名で構成された11チームがアイデアやプランの完成度を競い合った。各チームは、2回の事前セミナーでテーマや内容を深めたうえで競技に臨んだ。審査では、構想力・新規性・実現可能性・協力協調性・プレゼン力を評価し、京都市長賞、京都市教育長賞および京都市立高等学校校長会会長賞を決定した。

## ■高校生部門結果(敬称略)

## &lt;京都市長賞&gt;

ももんがんもも 京都市立西京高等学校(村山綾香, 稲葉萌恵, 久保舞花, 塚本風沙, 西川栄未, 福谷千尋)

## &lt;京都市教育長賞&gt;

YTT 京都市立伏見工業高等学校(浅井翔平, 長谷川拓弥, 真野拓磨)

## &lt;京都市立高等学校校長会会長賞&gt;

team FU 京都市立日吉ヶ丘高等学校(七宝璃彩子, 大槻 暢, 飯田和泉, 小谷奈央)



優勝チーム「川」へのトロフィー授与



京都市長賞を受ける「ももんがんもも」  
(ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー)



## 京都大学学術情報リポジトリ「KURENAI」が世界ランキング第8位の評価

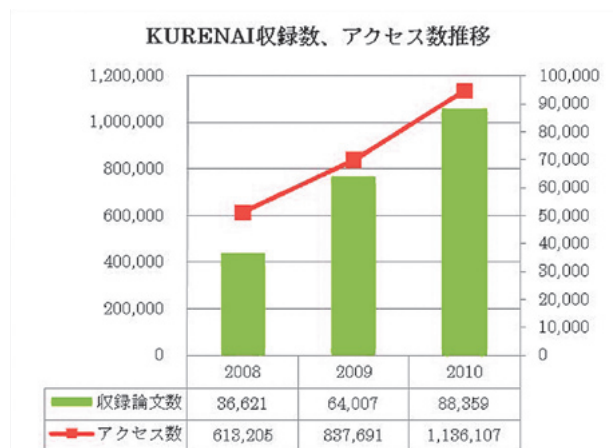
本学図書館機構が運営している「京都大学学術情報リポジトリ (KURENAI: Kyoto University Research Information Repository)」が、スペイン高等科学研究所 (Consejo Superior de Investigaciones Científicas) による世界リポジトリランキング (調査時期2011年7月) において、世界第8位、国内第1位と高い評価を受けた。

KURENAIは、本学で日々創造される研究・教育成果 (学術雑誌掲載論文、学位論文、紀要論文、科研費報告書など) を電子的に収集し、永続的に蓄積して、誰もが無料で読めるようにネットワーク上で公開するシステムである。京都大学、図書館機構、附属図書館の各ホームページから利用可能となっている。

このようなシステムは一般に機関リポジトリと呼ばれ、近年、世界で拡大している。機関リポジトリは、論文などを研究者が自由に読めるようにする

Open Access を実現するための有力な一手段であり、現在では世界で2,000以上が設置されている。

KURENAIは、2006年の公開以来、収録論文数、アクセス数とも着実に増加しており、本学の研究・教育成果を社会に発信している。



(図書館機構)

## 人文科学研究所第7回「TOKYO 漢籍 SEMINAR」を開催

人文科学研究所では、9月2日(金)、東京の学士会館において第7回「TOKYO 漢籍 SEMINAR」を開催した。

本セミナーの目的は、当研究所が80年にわたって蓄積してきた中国学研究成果をわ



麦谷センター長による開会挨拶

かりやすく紹介し、多くの人々に漢籍、ひいては漢字文化全般に関心を深めてもらおうとするものである。

今回のセミナーは、当初3月12日(土)の開催予定を東日本大震災のため延期していたものであるが、平日にもかかわらず129名の方が受講された。

セミナーは、麦谷邦夫東アジア人文情報学研究中心長の開会挨拶に始まり、「俗書の啓蒙力」をテーマに、永田知之助教「書儀－中世の文章作成マニュアル」、山崎 岳助教「善書－華僑・華人の人生訓」、

武田時昌教授「日用類書－庶民生活の科学知識」の3講師による講演が行われた。10時30分から16時までという長時間のセミナーであったが、参加者は最後まで熱心に聴講され、「どの講演も興味深く、資料が充実しており、講師の話もわかりやすく面白かった」、「次回も楽しみであり、是非参加したい」という感想をいただいた。

なお、次回の第8回は、「清華の三巨頭－新しい中国学の始まり」(仮題)をテーマに、平成25年3月に開催する予定である。



セミナーの様子

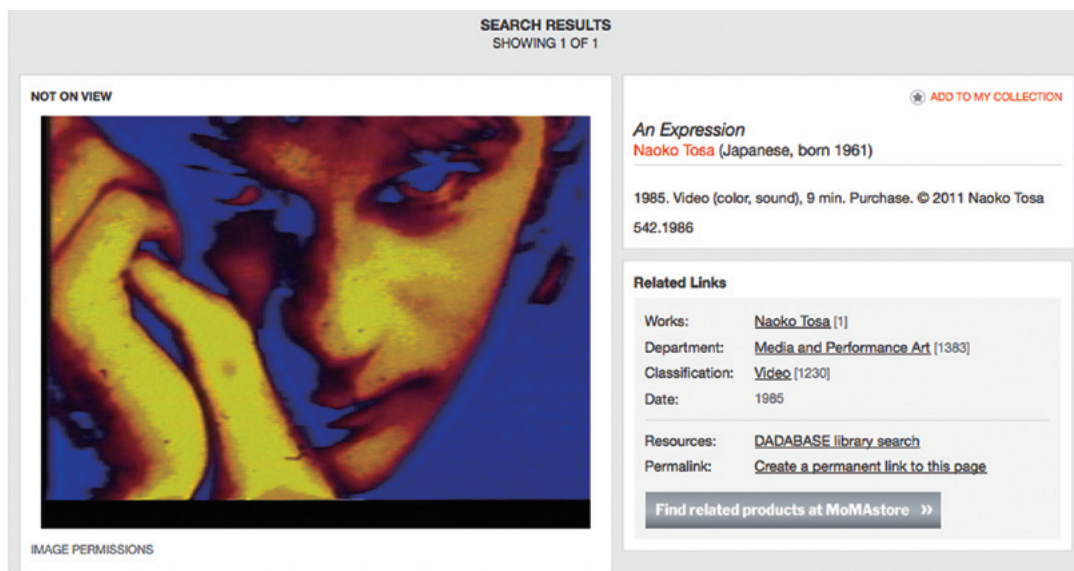
(人文科学研究所)

## 研究作品がニューヨーク近代美術館パフォーミングアート&メディア部門のコレクションに選定

このたび、土佐尚子情報環境機構教授のビデオアート作品「An Expression」(1985年作)が、ニューヨーク近代美術館のパフォーミングアート&メディア部門のコレクションに選定された。

マンハッタンのミッドタウンに位置するニューヨーク近代美術館(The Museum of Modern Art, New York) (MoMA)の新館の中央には、世界的に名高いMoMAの国際的な現代美術のコレクションを展示している。この美術館は、J.D.ロックフェラ

ー2世夫人らによって1929年に設立され、8点の版画と1点のドローイングの寄贈から始まったMoMAのコレクションであったが、現在では、6つの分野(建築・デザイン、ドローイング、フィルム・メディア、絵画・彫刻、写真、版画・挿画本)に分けられている。また、2009年に「フィルム・メディア部門」を「パフォーミングアート&メディア部門」へ拡大し、2011年からは世界中からコレクションを収集している。



本作品のニューヨーク近代美術館のウェブ : [http://www.moma.org/collection/object.php?object\\_id=120154](http://www.moma.org/collection/object.php?object_id=120154)

本作品は、まだデジタルやパソコンが普及していない1985年という時代に、光センサーで映像の輝度からリアルタイムに音を生成した作品である。映像の輝度が高いと低い音になり、低いと高い音になるというルールを与えている。映像は、点滅や反転などの特殊効果のみで制作され、それが音のリズムを生成している実験的な作品である。1985年当時、日本では特殊効果を多用したビデオアートは、タブーであった。つまりこの作品は、日本では認められていなかったのである。しかし、25年経って、この作品がなぜコレクションになったのかということを考えると、「タブーを疑え」ということである。新しいものを生み出すには、タブーを打ち破らない限りできないということであろう。これは、アートに関し

ただでなく、学問、新しい発明、スポーツなどすべてに通じることで、「やってはいけない」と先人がいうことを上手く破れたから新しいものを生み出すことができた、後世に役立つ知恵、文化、記録を残しているのではないだろうか。

また、MoMAでは、建築、商品デザイン、ポスター、写真、映画など、美術館の収蔵芸術とはみなされていなかった時代の表現までもを収蔵品に加え、日本製の電気製品や家具、映画作品などもデザインの歴史に影響を与えた優れた作品として収蔵されている。2007年1月には、auのau design projectで生まれた、日本でのみ利用できる4機種の携帯電話が収蔵品に選定されたことで話題になった。

(情報環境機構)



## 東北復興支援に学生ボランティアを派遣

本学は、8月26日(金)～30日(火)までの間、宮城県気仙沼市西舞根地区に本学ホームページで公募した学生21名と教員1名、技術職員2名、職員1名を派遣し、被災家屋の瓦礫の撤去のほか、甚大な被害を受けた養殖業の復興支援を目的とした人工林からの杉・檜の伐採、伐採木の山出し、養殖筏の組み立て、牡蠣の種付け、筏への取り付け等を行う東北復



牡蠣の種付け作業の様子

興支援に向けた学生ボランティアを実施した。同地区は、フィールド科学教育研究センターが進める「森里海連環学」の実践フィールドの場であり、同センター社会連携教授の畠山重篤氏(NPO法人「森は海の恋人」理事長)が養殖業を営んでいる。



牡蠣の取り付け作業の様子

学生のうち2名は、研究ボランティアとして参加し、同地区での森里海連環の実現を目的に舞根湾および気仙沼湾に注ぐ河川の水質調査と西舞根地域の

生物相(鳥類・哺乳類・爬虫類)調査にあたった。

学生ボランティアの派遣は本学にとって初めてのことであり、畠山氏とそのご家族、地域・関係者の方々の指導により、誰一人怪我することなく無事終了することができた。



気仙沼湾に流れ込む大川源流の矢越山で行われた植樹

また、ボランティアという貴重な体験に加え、畠山 信氏(畠山重篤氏ご子息)による講演が28日(日)に行われ、津波からの生還の体験談や、被災した自身が立ち直る間もなくボランティア活動に転じなければならなかった状況、今後の同地区における復興活動計画等の貴重な話を伺った。

本学では、今後も同地区での復興支援活動の継続を計画している。



畠山重篤氏ご家族、地域の方々との集合写真

(フィールド科学教育研究センター)



## 中学生向けゼミ体験講座「ジュニアキャンパス2011」を開催

9月17日(土)・18日(日)の2日間にわたり、中学生に学問の最先端に触れてもらうことを目的として「ジュニアキャンパス2011」を京都市教育委員会との共催により開催した。

今年で7回目を迎えるジュニアキャンパスは毎年好評で、今年度は過去最高の中学生約400名、保護者等約150名の参加者で賑わった。



特別講義の様子

初日の午前中は、開講式およびオリエンテーションを実施の後、「ゴリラの行動から人間の不思議な特徴を考える」と題する山極壽一理学部長・研究科長の中学生向け特別講義を実施。ゴリラの行動や生態から分かる人間の特徴について講義があった。講義終了後には、「ゴリラも泣くの?」「騙す動物はい

るの?」など活発な質問があった。

午後からは2日間にわたって、各研究施設や講義室において実験、工作、自然観察、天体観測などの体験型のゼミや、テキストをもとに議論するゼミなど35講座のゼミを開講した。実際の研究室などで行



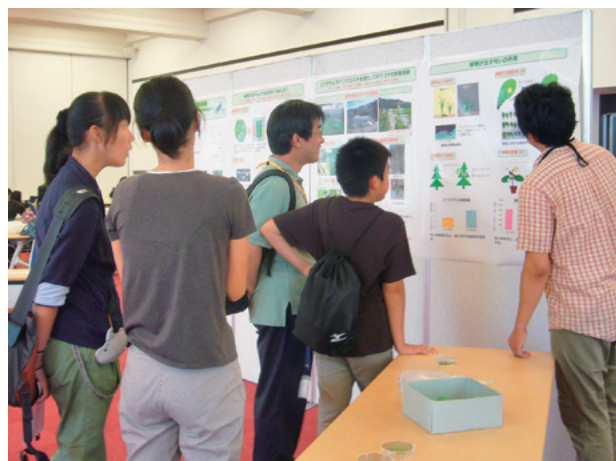
ゼミ「情報の海を探す・調べる—情報の検索と分析の技術」

われる最先端科学のゼミに思わず歓声があがる場面もあった。昼休みには、昨年に引き続き「大学院生等によるポスターセッション」も実施し、普段、大学でどのような研究を行っているかを中学生に分かりやすく説明するコーナーを設け、多くの中学生で賑わった。

また、総合博物館、附属図書館も開放し、珍しい展示や大学の図書の豊富さを感じてもらった。



ゼミ「化学—フロンティア軌道理論と電子計算機で化学が分かる?」



大学院生等によるポスターセッションの様子

(学務部)

## 防災研究所公開講座「巨大災害にどう立ち向かうかー想定とその限界ー」を開催

防災研究所は、9月29日(木)、キャンパスプラザ京都において第22回京都大学防災研究所公開講座を開催した。

甚大な被害をもたらした東日本大震災から、メインテーマを「巨大災害にどう立ち向かうか」とし、地震、津波発生のメカニズムから防災対策まで、これまで現地を訪れ研究を重ねてきた最新の研究成果をわかりやすく紹介した。

当日は中島正愛所長の挨拶の後、地震・津波基礎講座として「実用地震学：揺れる前に地震を知らせる」(山田真澄助教)および「津波災害とリアルタイム

予測」(安田誠宏助教)、午後からは「東日本大震災ー立ち止まって、地震科学の来し方を考えるー」(橋本 学教授)、「都市の浸水想定ー大雨・洪水に備えるー」(川池健司准教授)、「大規模災害と防災計画：総合防災学の挑戦」(多々納裕一教授)の5つの講演が行われた。

最後に行われた「総合討論」では、震災を機に関心が高まる防災・減災への取り組みに、受講者から活発な質問や意見が寄せられ講演者が回答した。会場は終始熱気に包まれ、一般市民、技術者、自治体職員等約200名の参加者は、最後まで熱心に聴講された。



中島所長による挨拶



講演中の橋本教授

(防災研究所)

## 平成23年度総長杯(卓球大会)を開催

本年3月に実施した総長杯スポーツ大会アンケート調査の結果に基づき、今年度は硬式テニス大会に替わり卓球大会(団体戦)が、9月29日(木)に総合体育館(地下1階卓球場)において開催された。

数多くの部局等から18チーム(129名)のエントリーがあり、松本 紘総長も選手として参加される中、各チーム優勝を目指し終始熱戦が繰り広げられた。

また、職場の応援団や職員の家族による応援等、



優勝した「チーム松本」



場内は大変な盛り上がりを見せ、そこかしこで一球一球に歓声が上がった。

午後8時から始まった決勝戦は、総長室・総務部の「チーム松本(代表者 中村一也)」が教育学研究科・物質-細胞統合システム拠点の「さいぼうぐ・だんでいーず(代表者 山田大輔)」を2対1で破り優勝した。

試合終了後の表彰式では、岡島 徹職員課長から優勝杯、表彰状および賞品が授与された。



準優勝の「さいぼうぐ・だんでいーず」

(総務部)

## 訃報

このたび、<sup>ふじた えいいち</sup>藤田榮一名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

### 藤田 榮一 名誉教授



藤田榮一先生は、7月24日逝去された。享年89。

先生は、昭和18年9月京都帝国大学医学部薬学科を卒業され、同年9月より京都帝国大学医学部副手として勤務された。昭和20年3月に海軍薬剤大尉(正七位)に任じられ、復員後、同21年10月京都帝国大学大学院医学部特別研究生、同26年10月徳島大学薬学部助教授、同29年4月に同教授を経て、同37年12月に京都大学化学研究所教授に就任された。昭和60年3月に本学を停年退官し、同年4月に京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和57年4月から同59年3月まで京都大学化学研究所長を務められた。昭和60年4月に大阪薬科大学長に就任され、学長を2期務められた後、平成3年3月任期満了により退職された。さらに、昭和62年6月に岡崎国立共同研究機構分子科学研究所評議員に就任され、6年間に亘り評議員を務められた後、平成5年5月に任期満了

により退任された。

先生は、永年に亘って天然物化学と有機化学の研究に邁進され、昭和53年4月には「ジテルペン、特にカウレン関連化合物に関する研究」により日本薬学会学術賞を受けられた。その後も、不斉合成研究、生理活性天然物の全合成研究、癌治療用放射線増感剤の開発等、多くの卓越した研究成果をあげ、300編以上の論文として発表された。また、先生は、徳島大学と京都大学での34年間に亘る研究教育指導による人材育成に尽力され、極めて多くの優秀な教授、助教授を輩出された。

さらに、日本薬学会、日本化学会、有機合成化学協会および近畿化学会など諸学協会の運営と発展に多大な貢献をされ、昭和55年には日本薬学会近畿支部支部長、同59年には有機合成化学協会関西支部支部長を務められた。これら一連の秀逸な研究業績と教育への多大な貢献により、平成8年11月に勲二等旭日重光賞を受けられた。

(化学研究所)